中央手術部

１．スタッフ

部長（教授）　福井（ふくい） 寿啓（としひろ）

副部長（准教授）生田（いくた） 義浩（よしひろ）

助教２名

２．診療部の特徴、診療内容

手術部は手術を受ける患者、手術を行う外科医の両方にとって、安全・円滑・快適に手術が行える環境・人員・器材を提供し運営している。この目的に沿った教育・研究を行う部門で、外科系の全ての手術および内科系の特殊な処置等に対応している。当手術室は、平成 19 年１月から新中央診療棟６階の新しい手術室に移転した。手術室は CT 撮影機能を有する手術室を含む 13 室に増室し、各手術室には術野および室内モニター用カメラを設置した。麻酔科医師室では、全室の患者生体情報と術野の情報が供覧できるようにし、安全性の向上に努めている。また、全室で空調設備に加え、手術室内環境汚染にも配慮し全室で環境ガス・塵埃数監視システムを稼働させている。各手術室は HEPA フィルターを介した層流を行い、クラスⅡ以上の清浄度を保っている。また、２室は高度な無菌手術が可能な条件を満たしている。上記の空気清浄度に加え、手術器械は術式毎のコンテナシステムで運用し、使用後は効率的な洗浄・滅菌システムで対応し、手術部位感染症減少および手術部職員の負担軽減に取り組んでいる。

平成 24 年度には回復室を廃止し、緊急用であった２号室で定期手術の稼働を始めた。平成 25 年度にはロボット手術も開始し、平成 26 年１月には５階にハイブリッド手術対応X線透視装置を併設した手術室を増設した。また、平成 31 年１月からは５階に２室増室工事を開始し、令和元年度は９月まで 13 室、10 月から 14 室で運用した。令和２年１月には２室増設工事が終了し、16 室（１室は緊急手術用）での運用を開始している。令和６年１月には手術支援ロボットが２台になり連日稼働している。

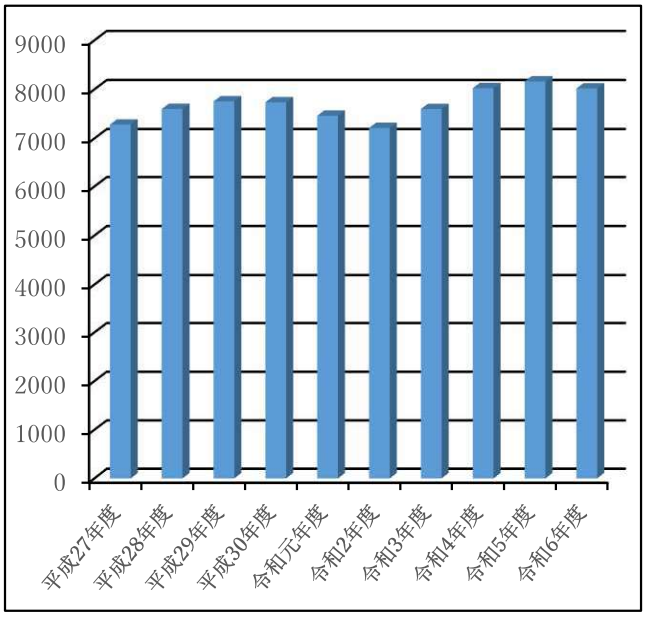
３．診療体制

上記の手術部職員に加え、看護師長１名、副看護師長４名を含む看護師 68 名、ナースエイド１名、クラーク２名、事務補佐員１名が勤務している。平成 21 年度からは薬剤師１名、放射線技師１名も常駐となった。平成 27 年度には、ハイブリッド手術室を利用する経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）を開始している。予定手術の申込は電子カルテ上で行い、毎週木曜日に各科手術室担当医師と週間手術予定のスケジュール調整会議を開催し最終的に決定している。原則として各科の週間手術枠を撤廃し、出来るだけ多くの手術を効率良く行える環境を整えている。また月曜日から金曜日まで麻酔科スーパーバイザーを決め、手術室安全面の管理と運営を行っている。夜間および休日の緊急手術は、いつでも可能にするため当直体制（麻酔科医師２名、平日夜間のみ麻酔科医師居残り１名、看護師２名）で対応している。看護の面でも、平成 25 年４月から、それまでは看護師が実施していた手術室周辺補助業務を外注委託とした。具体的な業務内容は、手術室の清掃・片付けおよび次の手術の準備、翌日の手術の必要物品の準備、ガウン着用介助等である。外注委託で得られた時間は、術前・術後訪問や新人教育に充てている。

４．診療実績　―手術の症例数等―

総手術症例数は平成 13 年度に 4,000 例を超え、以後徐々に増加傾向で平成 19 年度からは 6,000 例前後となった。その後も年々症例数は増加し、平成 27 年度からは 7,000 例を超えている。令和元、２年度は COVID-19 感染症の影響もあり症例数は減少した。下図に過去10年間の手術症例数の推移を示す。

【過去 10 年間の手術症例数の推移】



令和６年度の手術症例数は 8,019 例で、そのうち全身麻酔症例数は 5,505 例（約 69%）であった。手術症例数は前年度と比較して約 150 例減少したが、8,000 例を超える手術症例数は維持した。

５．医療人教育の取組

医学部臨床実習の学生に対して１回/週、1-2 時間程度の手術医学の講義を行っている。臨床工学技士を目指す学生、看護学生、救急救命士等の受け入れを積極的に行っている。

６．研究活動

研究活動は主に臨床研究を行っており、手術室内環境汚染の状況、麻酔中・手術中の自律神経反射、麻酔器の特性、手術室災害対策、超音波ガイド下持続末梢神経ブロックの鎮痛効果、シミュレータを用いた超音波ガイド下中心静脈穿刺の検討、術中体温管理、術中体位の検討など手術医学関連の研究を行い、学会や論文での発表を行っている。

【平成 19 年に稼働開始した手術室】

【ロボット手術風景①】

【ロボット手術風景②】

【ハイブリッド手術対応手術室の手術風景】

【令和２年に稼働開始した 15 号室】